

「火を焚く術を考へる」 熊谷ふみを

にんげんが名付けけふより春の蠅
薄氷やとうに死者には忘れられ
見張台こぼれし春の水輪かな
哭くといふ字は男なり春の宵
啓蟄や国文法をおろそかに
ひとりづつ春満月をよこぎりぬ
物怖ぢも物音もせて桜葉に
香水を隠しことばのやうにふる
点さねば虫の匂ひのほうたるよ
蟻地獄大きな家の小さき戸
無頼とは長生きのこと梅雨夕焼
一生の激しきときの涼み台
丸洗ひふるさとのなき夏帽子
どこからか虫湧いてくる色暦
流星や石に打たるる日の来るか

悼・おさむ先生

茜空秋草の毘仕掛けよう
法師蟬火種香炉の中にあり
枯いろのおんぶばつたに地球かな
体温をわけ合うて桜紅葉かな
流木に一對はなし冬汀
けふといふ日を糺さるる大海鼠
枯野にて火を焚く術を考へる
冬銀河吃水線を傾けぬ
氷張る水の用意をしてをりぬ
据うるとは植うることなり霜の墓
組板の上の鉛筆去年今年
雪が来てふるさとのある夜のやうに
養老や金魚の泳ぐ冬の水
加はりぬ一寒林の連携へ
新年といふ鬼がくる鬼が来る